

不幸中の幸い —あと10秒遅ければ…—



北村 豊

年で創立90年を迎えた歴史ある新生病院に、私が20年以上も前に勤務していた時のことである。

”ドスン”という振動を伴う音は、突然に手術室にも伝わって、窓のない医療現場は一瞬にしてただの暗室と化してしまった。

その数秒後の暗闇から聞こえてきたのは、看護師さんの「あれ！どうしたの？」という早口で緊張に満ちた第一声であった。

その落雷事故は、信州の小布施町にある昨

全身麻酔下での手術を計画し、正に術野の切開をしようとする直前にその停電事故は、起つたのであつた。起動するはずの病院の自家用発電装置がなぜ発動しないのか？と不思議に思いながらも、麻酔医と相談の上、その日の手術は中止とした。

病棟に行って見ると患者さんは既に覚醒

し、短時間ではあつたが全身麻醉中の意識が欠落し、自分で”術野直上になるはずであつた頬”を手で押さえて思議そうにされたため、麻醉中の落雷で突然の停電が起り、復電の予測が立たなかつたため、切開直前までいたまま、切開直前までいついた手術を中止したことを伝えたところ、安堵の表情をされ

たことにほつとしたものである。落雷の標的は、病院の庭にある樹径70～80cmもあるヒマラヤスギの大木であり、その太い幹が爆撃でも受けたようすに碎けて散らばっていた。さらにその木の根元近くの地面からすぐ近くに建つ病棟に向かつて少しづづざくした幅

20cm位もある地面が樹枝状の形で隆起して走っている珍しい現象が見られた。調べてみると、落雷（直撃雷）を受けた場所より周囲に極めて強力な電流が放電されることによって描かれる木の枝のような图形があり、これを最初に発見したドイツの物理学者の名前にちなんで”リヒテンベルグ图形”と呼ばれていることが判つた。

このリヒテンベルグ图形は、直撃雷、もしくは誘導雷の電流が皮膚表面を放電火花となつて流れた時にも人の肌に赤味がかつたシダ状のフラクタルな形の图形が出ることがある。これが、医学用語では「電紋」と呼ばれる雷撃傷の局所症状のようであ

る。その時の落雷は直撃雷にかなり近い誘導雷であつたらしく、中部電力の技師の人によれば、あまりにも強力な電流では、自家用発電装置も作動しなくなってしまう。そこで、私は思い知られたが、現在では多くの病院が以前から備えられており、自家用発電装置に加えて太陽光発電やバッテリーなども準備され、フェールセーフの方向へとシフトしていると聞き及ぶ。

(上高井郡小布施町信州口腔外科インプラントセンター 所長)